

現代社会は、科学技術の飛躍的な発達により多くの人々が物質的な豊かさの中で、快適で便利な生活を送れるようになった。しかし、利便性を過度に追求するあまり、経済だけでなく教育や文化の多様性さえ数値化をもつて優劣をつけるなど、物質だけでなく欲望までも膨張化し続けているように思える。現代社会の陰の部分に目をやると、いじめや体罰、格差その他の苦悩による自死をはじめ、人間の尊厳を根底から覆すような問題が発生している。

その原因の一つには、人間の自己中心的な考えが蔓延し、人と人とのつながりや命の尊厳といった、伝統の中で培ってきた目に見えない事柄への感謝や「畏敬の念」を忘れてしまっている

人生の大切な 羅針盤

園城 義孝

● 龍谷大学理事長

ことがあるのではないだろうか。心の荒廃がやまない現代社会において、まさに今、私たちは何を指針にして生きるべきかその姿勢が問われている。社会から人間育成を寄託されている高等教育機関は、そのような課題に対して真摯に向き合う必要がある。

私は現在、学校法人龍谷大学の理事長を務めている。本法人が設置する龍谷大学及び龍谷大学短期大学部は、「浄土真宗の精神」を建学の精神とし、その歴史は、一六三九（寛永十六）年に西本願寺境内に宗門子弟育成のために設けられた学寮に始まる。時代とともに学林、大教校、普通教校、大学林と名称や形態を変えながら、本年度で創立

三十四年目を迎えた。この間、教育研究の灯火を連綿と絶やすことなく継承し、ひたすら高い知性と豊かな情操に培われた有為な人間の育成に努めてきた。

この長きにわたる歴史の中で、浄土真宗のみ教えを伝える僧侶の養成機関としての使命を果たすとともに、早くから真宗や仏教の教学のみならず、広範な教養・学識が必要であるとの認識に立ち、明治初期には英語学、物理学、倫理学、経済学などの学問を取り入れたカリキュラムを導入して教育を始めた。当時、僧侶である島地黙雷や赤松連城らが欧州を視察し、先進的に教育改革を進めようとした情熱に思いをは

せるとき、頭が下がる思いである。

また、一九六一（昭和三十六）年に経済学部を設置して以降は社会科学系の学部を増設し、一九八九（平成元）年には宗教と科学と人間がどう向き合うかを追求すべく、仏教系大学として初めてとなる理工学部を設けた。現在は、人間の根源である「命」を支える「食」「農」について教授する農学部を設置（二〇一五年設置予定）すべく準備活動を進めている。

このように今日までの間、建学の精神に基づく人間教育を根底に、高い能力と確かな知性をもつ有為な人間を輩出すべく教育に取り組み、諸学問の研究を追究してきた。その原点には、浄土真宗の精神に基づく教育を実践し、つねに「人としていかに真実に生きるか」を問い続けようとする精神が、脈々と受け継がれてきたと自負している。

二〇一一（平成二十三）年三月に起こった東日本大震災を振り返ったとき、私たち人間は自然の猛威の前ではいかに

に小さいかを思い知らされ、また原子力発電所の事故を通して、便利さや快適さだけを追求してきた人間の有り様に気づかされた。そして多くの尊い命が失われた大震災を通し、人と人とのつながりである「絆」の大切さをあらためて認識させられた。

私の大学では現在、約二万人の学生をお預かりしている。在学している学生たちは皆、将来は「社会」という大海原に舟をこぎ出さなければならない。高等教育機関における学びは、人生という大航海に臨むにあたって、舟の作り方や操作方法、地図の見方や天候の知識などを修得するようなものではないだろうか。社会という大海原には多くの希望や喜びがあるが、一方では迷いや悲しみ、戸惑いなどがあることも事実であり、それを避けては通れない場面も数多く出てくるだろう。学生たちには「どのように自分の人生をつくっていくのか」「他者とともにどのように生きていくべきか」というような

「人生の大切な羅針盤」を学生時代にぜひとも学んでいただきたいと思う。そしてつねに「人としていかに真実に生きるか」を問い続けながら、人々の悩みをわがこととして重ね合わせてとらえ、互いに敬い支え合い、それぞれの命が輝き合えるような社会をつくりあげる一員になっていただきたい。

そのような思いを抱きながら、学校法人を預かる責任者として大学改革を進めていきたいと考える日々である。

